

イギリス的な情景

— the scenes in Britain —

早稲田大学 教授
小田島 恒志

(第19回)

嵐が丘

小学生の頃、同級生に文字通りの文学少女がいて、愛読書はエミリー・ブロンテの『嵐が丘』だと言っていた。自分が将来イギリス文学を研究する身になるとは思ってもいなかったこちらとしては、『嵐が丘』？ それはそれは寒そうな…とただただ荒涼とした荒れ野を想像するだけで、大して興味も感じなかった。『嵐が丘』について語るときの文学少女の知性と感性に嫉妬していたのかもしれない。

英文科を出て、大学院で学ぶようになった頃には、自分もすっかりこの小説に魅せられていて、舞台となったハワースという町をいつか訪ねたいと思っていた。で、ようやく訪れることができたのは今から10年前、すでに英文科の教員になってから、在外研究期間に家族でロンドンに暮らしているときのことだった。

あらかじめ予約しておいたB&Bに到着すると、外壁が花で飾られ、ベッドルームはぬいぐるみや素敵な調度品がアレンジされていて、いかにも世界中の文学少女や元文学少女（と少年や元少年）が観光に殺到する町なのだろうなと思われた。さっそく散策に出かけ、ブロンテ姉妹が暮らしていた牧師館や学校を見て回り、「Penistone Hill」という「丘」まで足を伸ばした。全然「嵐」じゃない！ 素晴らしい、絶景！ 8月の終わりという季節に来たのが正解だった。目の前に紫色のヒー

スの花が咲き乱れて、いや、乱れていない、見事に丘一面びっしりと覆っていたのだ。どこかで嵐を期待していたけれど、これは嬉しい誤算だった。

実は、大学時代の恩師がハワースを訪れたときのことをエッセイに書いていて、実際に散策中にひどい嵐に見舞われ、これは体感するチャンスとばかりに歩き回っている間に日が落ちてしまい、町では「日本から来たプロフェッサーが遭難した！」と騒ぎになって捜索隊まで出たという。その体験を嬉しそうに語る恩師の知性と感性には吃驚する、嫉妬はしないけど。

ハワースの駅周辺から景色を見渡すと、小高い丘の頂に一本だけ、風力発電の白い風車塔が立っている。風景にそぐわない気もするが、嵐の丘であることの矜持のようにも見える。

ブロンテ三姉妹のうちシャーロットとエミリーはこの町に眠るが、三女のアンは教師の仕事をしていた海辺の町スカーバラに埋葬されたと聞いた。後日、スカーバラへ行った際、「丘」というよりほとんど「山」のような高みにある城跡の脇の墓地にあるアン・ブロンテの墓を訪れた。寒風が吹きすさび、ここの方がはるかに「嵐が丘」だった。寒々とした風景の中、アンの墓前一面びっしりと花が植えられているのが印象的だった。